白隠禪師

兎專使稿

特257
158
54
85

始

特257
158

兎專使稿

答廣瀨何某梧右書

七月六日之貴書、同じき十九日落手、增御健達に御勤被成候條、珍重の至に候。弊廬無恙罷在候、賢慮を勞せられまじく候。舊冬は遠路の處見事成る濃紙十帶芳慮にかけられ、折節書寫の存じたち有之、好紙渴望之刻、別て悅入候。又々此度御念入候御紙面、寔に以て對顏の心地、恰悅不淺候。御修行間斷なく御心がけ被成候旨、一段の御事に候。依之、偶作一篇、和歌一首、再三吟弄仕候。御奇特千萬に候。老父存寄も有之ば、返書に申進候樣にとの御事、承屆候。

兎角三教の學者、何れに限らず、第一は、大道の淵源に一回徹底不仕候ては、何事も夢現の如くにして、確と致したる心地は無之事に候。是非々々、一回大道極則の處を見徹すべきぞと、勇猛の御志肝要に候。　如何にして大道には徹底すべきぞとならば、只今此文を披覽し、或は笑ひ、或は談論する底、是れ心なりや、是れ性なりや、青黄赤白なりや、形有りとやせん、形無しとやせん、内外中間にありや、萬緣に應じて、了々分明に應對する、是何物ぞと、靜處を好まず、閙處を棄てず、打返し〳〵、幾度も點檢可被成候。　深く吟じ入候はゞ、只空廓虛凝にして、身心ともに輕く、生もなく、死もなく、徒に了々分明成る計に被成事に候。　往々に、此

處をば認めて大悟と相心得申者も間々多く候。　是は識神を認得する底の大癡人なりと、長沙大師も呵せられたる事にて、大いなる錯りに候。　此時少しも歡喜を生ぜず、僧、趙州に問、狗子に還て佛性ありや否や、州曰く無と、是れ何の道理ぞと、晝夜に參窮可被成候。　親切の工夫現前致し候はゞ、瑠璃瓶裏に入るが如く、金剛圈中に投ずるに似て、只茫然と被成事に候。　此時容さず、隨分精彩を着け、參窮致し候はゞ、參窮底の言句に和して、身心共に打失したる心地なるべく候。　恐怖を生ぜず、間もなく進み候はゞ、忽然として一夜も二夜も寢付かれざる程の大歡喜可有之候。　是れ彼の鳳、金網を離れ、鶴、籠を抛つ底の時節、窮す

る時は變ず、變ずる時は通ずとは、此等の趣に候。　此に於て、孔夫子の貫レ之、孟軻氏の浩然、粲乎として目前に分明なるべく候。　此時從前手前にて彼是れ了見を致し候事共は、腹を抱へて大笑する程、無調法なる不覺悟にて可レ有レ之候。　此處をこそ、朱子は、力を用ゐること久くして一旦豁然として貫通すとは申され候へ。　晦菴も、前方密々に參禪工夫せられたる仁の由にて、一旦入理の得力は、紛れも無き仁と相見え申候。　然れども、猶最後兩重の關鎖を隔て、祖庭は天涯遙かなる事に候。　乍レ去、當時儒釋の學者の及ぶべき事ならず候。　さる程に、漢儒唐儒も說き及ぼさざる見處有つて、恣に聖經賢典を註解し、令名を宇內に施

されたる事に候。　空谷の隆禪師も、正直篇といへる一卷の書に、念頭に評判被レ致候。　近代朱子流の學を嫌ふ人ども多く候由、夫は中々狹々敷了簡に候。　聖人は常の師なしと申事の侍れば、朱子に限らず、程子に限らず、婦人小子の語と雖も、實學の助けならんは、捨おかず、工夫を下して力を得る樣に心懸け候をこそ、學を好む共、達人共可レ申候へ。　只手前の淺はかなる了簡を恃みて、先賢を輕んじ、契はぬ小智を飾りて、彼此れ評判致候は、片腹いたき事共に候。　澆季末代の風俗、儒者も佛者も、精神は輭弱に、根機下劣にして、世智濃厚に、實德薄くして、易きを好んで難きを恐れ、淺きに走りて深きを棄て、近きを執らへて遠きを顧

みず、只道は君臣父子の彝倫の間を出でずと計り心得て、上もなき聖經賢典を判棄し、及びも無き實德純善の君子を捉へて、唐宋の儒者は取るに足らず杯沙汰致し、甚歟は、孔孟以來正見底の人なしとす。特に知らず、漢に傅毅あり、牟子あり、吳に大傅闞澤あり、晉に隆遺民あり、陶元亮あり、唐に虞世南、杜如晦あり、房玄齡、蕭瑀廷あり。彼の善惠大士、李長者、及び寒拾二賢士の如きは各大權の垂跡、補處の化現にして、是を散聖と道ふ。凡愚の輩の謾りに可否すべき類に非ず。龐道玄、李駙馬、楊大年、陳尙書等の四君の如きは、見道分明にして、精く參禪の玄微を盡せり。四海の衲子、天下の老和尙、其名を聞く時は、牙戰き股震ふ。郭功甫、張商英、又これに次げり。張拙秀才、陸亘大夫、公美裴相國、鬳齋林先生、白居易、周敦頤の諸君子、及び二程あり、三蘇あり、張九成、呂居仁等の諸老儒、漢唐より宋明に到りて俊才星の如くに列り、賢良碁の如くに敷く。精く儒域の堂奧を窺ひ、深く禪海の源底を探る。今時儒釋の學者、他の杖履に侍する事も亦能はじ。夫子の道、若し今の人人の心得らるゝ如く、彝倫の間のみならば、顏子の陋巷に遁れて、枯淡を嘗め、原憲の漏室に潜みて、窮困を守られしは、怪しき働にては侍らずや。然るを、夫子は囘や三月仁に違はずと、賞美し玉ひしは、如何なる聖慮にて候や。但し夫子二賢も彝倫の間に在る事を知り玉はずとせんか。

我今全く彝倫の間に道なしと道ふにはあらず。彝倫の間にのみありて外に求むる事を待たずと言はゞ不可なり。人將た言はん、古の聖賢何ぞ道を離るゝ事を恐れざるや、大舜は須臾も離るべからざる道を離れて、湘水に逝きて、空しく一雙の緑竹を留め、大禹は須臾も離るべからざる道を離れて、洪水に外にある事三年、文王は須臾も離るべからざる道を離れて、羑里の囚となり、太公は須臾も離るべからざる道を離れて、渭水に釣し、周公は須臾も離るべからざる道を離れて、上帝に仕へん事を求め、夷齊は、蕨を首陽に折り、李聃は青牛に跨りて函關を出で、亞飯干は楚に適き、三飯繚は蔡に適き、孔子は糧を陳蔡に斷ち、孟軻は轍天下を廻ぐり、子路は衞國に義死し、百里奚は虞を棄て秦に入り、季札は列國に使ひし、靈均は汨水に沈み、退之は潮洲に左遷せらる。其餘、孔門三千の英豪、皆是れ須臾も離るべからざる道を離れ、來りて孔子を學ぶ。古の道を離るゝ人、多くは聖賢の名あり。今長安の豪家、富人の子弟を見るに、妻孥の愛に曳れて、室家を離るゝ事片時も忍びざる者あり。彼れ又道を好む事、聖賢に勝れりとせんか。且夫れ道は士庶人には足りて、聖賢には却て乏敷物と言はんか。彼の浮圖氏の彝倫を離れて道を求む、是又甚惡むべからざる者に似たり。若又果して彝倫の間にのみありとならば、君子百里に使する時に、君臣父子

を離れて遠く行く、道と疎濶する事百里すと言はんか。君子千里に使する時、夫婦昆弟を離れて遠く行く、道と別離する事千里すとせんか。　須臾も離るべからざるの大道、百里の堠店を隔て、千里の嶮岨を挾む、獼猴の林樹を離るゝが如く、魚鼈の海水を出るに似て、大に力を失せんか。夫子魯を去りて衛及び陳に適く、時に其從者の顏淵、閔子騫、子由、子夏の門弟のみ、須臾も離るべからざる物を如何、大夫の車何ぞ君臣父子を載せざる。　怪哉、外に求めざるの大道は胡爲の物ぞや、雲煙の如く、君臣父子の間に混交する者か、將又月暈の如く、夫婦昆弟の間を環抱する者歟。顏子既に彝倫を離れて陋巷に居す、是總て道を顧みざる者とせんか、囘や三月仁に違はずとは何ぞや、夫子の所謂仁は、彼の顏子の所謂前に在るかとすれば、忽焉として後に在る底の大道にあらずや、此時彝倫の大道、顏子を慕ひて窃に來りて陋巷に在る者三月、囘をして仁に違はしめざるか、將又顏子大道を慕ひて家に隔たる事三月、夫婦昆弟の間に交りて仁に違はざる事を得るか。　或人の曰く、忽焉の語は囘が未だ道を見ざる時の語なりと。　怪哉、囘未だ道を見ずして、胡爲の物を指してか、此の奇怪の言を出すや。　醉夢の狂言か、疫熱の譫語か。　纔に貳萬三千字の金文、未だ道を見ざる底の門人の閑語を載せ得て何の用ぞ。　特に知らず、顏囘三月仁に違はずして、初めて者般

の親切の語を說き得來る、其餘の七十子の夢にも嘗て未だ見ざる處なる事を。　夫子常に孝悌忠信を談じて、弟子に敎へ、吝まざる事水火の如し。　然るを、子貢言はずや、夫子の言、性と天道とは、得て聞くべからずと。　晦菴下面に注解して曰く、性と天道とに到りては、夫子罕に是れを道ふのみと。　怪哉、道若し彜倫の間に在らば、罕れに言ふとは何の道ぞ。　或人の曰く、夫子の道は人道なり、天道は罕れに言ふべきのみ。　予が曰く、然らば即ち、天道は別に高遠の處に在りて、人道と天道と卵肉の黃白を相分つが如く、宇宙の間に兩道有りとするか。　夫子の曰く、我道は一以て之を貫せりと。　是又何んの道ぞ。　天道と人道と、貫通せる底の我道と、伊の三點の如く、各立せりとするか。

嗟、人道を見ざる時は見地明らかならず、明らかならざる時は中心疑ふて決せず、決せざる時は言語必ず支離す、如かじ一囘大道を見徹して、平生を輕快にせんには。　熟々思ふに、罕に道ふの語は、朱貢二子の心にして、必ずしも夫子の心ならじ。　夫れ夫子の道に於ける、融鎔無碍、玉盤明珠を走らしむ、光々映徹すること一器の水を江湖に投ずるが如し、纖毫ばかりも縫罅なし、純々焉たり、混々乎たり。偃仰屈伸、咳唾掉臂、總て是れ大道なる者は、特り只夫子歟。里仁鄕黨の二篇の如きは、佛に法華あるが如し。　是を讀むに、覺えず人の心をして消和せしむる事、朝曦の霜露に

於けるが如く、千載の下嚴然として在すが如し、縱令ひ海口も賛嘆し及ばず。然るを、今時往往に道ふ、里鄕の二篇は、孔夫子恭謙雅閑の態度、風流温藉の體裁にして、聖德の餘波枝末なり、講ずるに足らずと。錯れるにあらずや。夫子曰く、我爾に隱す事なしと。隱さゞる底是何ぞ。學者尋常此語を三復せば、必ず里鄕の二篇、常情の量るべきに非ることを覺得せん。而後に、罕れに性と天道とを道ふの語、果して夫子の心にあらざる事を了知せん。古へ我は禪を學んで儒を明らめたる者なりと申置れし先賢も是あるよし、承及候。是實に自性の本根に徹し、大道の玄微を洞照し、儒敎の淵源を貫通したる者にて、寔に人中の英傑なり。何を以てか是を知るとならば、夫れ禪の會得し難き事、中々庸才懦弱の士の及ぶべき事ならず候。然るを信得及し、透得過する底の人、三敎の間に毫釐も凝滯是れ有るまじき事は、少しく參禪の覺えあらん人は、怪み疑はざる事に候。大凡佛理の源底を究むる時は必ず仁道の本根に徹底する事、必然の義に候。されば仁は中下の士の努々量り知るべき事ならず候。韓愈が所謂博愛是を仁と云等の麤々敷事に侍らず、孔夫子も、敬ひ愼み玉ひし大事にて候。然るに依て、孟武伯、子由、公西華等の人人にさへ、仁を知れりとは許可し給はず候。斯く言へばとて、貴翁も今日より禪學に入り給へ、坐禪し給へとて、例

の浮圖氏の癖にて勸め申には侍らず、縱ひ貴翁禪學し給ひて、大智眼を開き、大歡喜を得給ひたりとも、左のみ佛法の大光明と申にも無之、禪道の大威德と申にも侍らず、斯く迄汗水出して書付け參らすべき事にも侍らず、去りながら貴翁も一方の人傑にて、年久しく三敎の間に心を寄せられ、修練の志も淺からぬ人にて侍れば、迚もの事に、大道の本源に徹し、仁義の淵底を明らめ、圖らず、大怡悅を得て、安堵の眉を開き給へかしとの方寸の親切にて候、只今迄の御修行にては、一生墓々敷御得力は努々是あるまじく候。晦菴曰く、異端の虛無寂滅の敎、其高き事大學に過ぎたれども實なしと言へるは、是れ晦菴が排佛の暗疾、

妬害の陋臆より起りし、取るに足らざる鄙詞なり。尋るに、夫眞如海廣く、法性天廓なり、大千を漚沫に屬し、賢聖を電拂に空す、暗に無智の輩、俄に是を聞かば、誰れか驚怖せざらん。譬へば、彼の海島邊鄙の細民、深山三家の野人に向て、長安豪家の富貴、帝都樓觀の莊麗を談ぜば、驚疑して必ず謂はん、其麗しき事草舍に過ぎたれども實なしと。豪家は野人の疑怪を恐れて毀つべからず。豈帝都の科ならんや。彼の舊井田疇の蝦蟇、山溪汚池の鰌鱣に對して、北海の波瀾、南溟の浩渺を談ぜば、必ず疑ひ恐れて言はん、蛟龍、海若、南溟の談、其大なる事、池井に過ぎたれども實なしと。豈江海の罪ならんや。江海は鰌鮒を恐れて縮

むべからず。佛に半滿權實の經卷あれども、高きを談ぜず、低きを說かず、只末代の行人をして、高からず低からざる底の本具の大道を知らしめんとす。根熟大機の衆生を化するに、方廣華嚴の大旗を弄し、珍御寶聚の大衣を着し、小根劣機の衆生を化するに、鹿苑草舍の小乘を談じ、麤弊垢膩の衣を纏ふ。有爲住相の衆生を化するに、寂滅無相の空理を談ず。高踏驕奢の異學を化するに、高廣寛大の法體を示す。大凡八萬四千種の法門有りて、無量解脫の妙義を具せり。是れを利生の法財と道ふ。譬へば、世の良醫の肩輿に駕して、無心にして即ち行く、胸中初より一方なし、病床に近づき、强弱を見、九候を窺ひ、五內を察し

て、而後に種々の方劑を投ず、其補瀉温凉は、病者にあるべくのみ。豈に一方を以て良醫を誇して可ならんや。或は王者の叛國を問んが爲に、王庫數千種の兵器あるが如し。夫れ兵は不祥の器にして、止む事を得ざる時は用ふ。豈王者の常ならんや。法財も亦然り、豈に佛の常ならんや。文公大小大の老儒、惜むべし、排佛の妬眼、佛道の高明なるを明らめず、識量狹くして、大學の寛宏なるを量らず。若し大學の高明たるを明らめば、何ぞ佛道の高明なるを怪まん。佛道の寛宏なるを量らば、何ぞ大學の寛宏なるを知らざらん。彼の清淨寂滅の諸說の如きは、有爲住相の衆生の爲に設く。有爲住相の病いえば、何ぞ寂滅の藥

を留めん。然るを寂滅の所説を以て佛敎を高しとして是をなみせば、衆盲の象を探りて終に全象を見る事能はざるが如し。夫れ山は頂きを窮めざれば、遠きを見る事能はず、海は底を盡さゞれば、深きを量る事能はず。佛敎は高しとして忌み棄て、道敎は深しとして恐れ避け、夫子の道は彝倫の外に出ずとして、徒に蠢々碌々として飽暖のみを求めて、內妻妾の愛に曳れ、外名利の私に蓋はれ、舊に依て、只是一箇鄙俗の凡愚、何の力あつて、君を堯舜の君にし、民を堯舜の民とする底の盛事あらんや、實に笑ふべし。大丈夫兒學ばずんば則止矣、若一日も學を好むとならば、高きを窮め深きを探りて、誓て大道の源底に徹し、人欲の私を盡し、人に過ぎたる智見を具して、能く人を敎へ、衆に超えたる識量有りて、能く衆を導く。夫惟れば、大道を見ざる時は其志高からず、凡愚の舊習に曳かれ、鄙俗の情念に蓋はれて、彼の人欲の私に勝つ事能はず、四端を養ひ得て、能く仁に能く義ならまく欲すと雖も、得べけんや。君子は然らず、能く高遠を窮めて近習を救ひ、能く寛大を盡して鄙微を助く。此故に、上世の聖君明主は、尊を屈して卑に附き、己を虛にして士に下り、惟道惟求む。黃帝は三七齋戒して道を黃成子に問ひ、且大眞に學ぶ。堯は威子壽に學び、舜は務成跗に學び、禹は西王國に學び、湯は伊伯に學び、文王は郭政に學び、周公は太公望に學び、孔子は

周に行きて禮を老耼に學び、孟軻は業を子思の門人に受く。　君臣主從と安行生知の彥聖なるすら、學を好む事斯くの如し。　豈夫れ空敷彝倫の間を出でずと言ひて、道を求めず、學を修せず、面に牆して一生を錯るべけんや。　須く知るべし、苦しみ勤めて道を求め、而る後に凡にあらず聖にあらず、眼横鼻直、進み勵んで學を究め、而る後に智にあらず愚にあらず、喫茶喫飯、只是尋常、無用高閑の一老翁なる事を。　此に於て室家に宜しく、鄉黨に宜しくして、能く君臣父子夫婦昆弟の間を治む。　縱ひ王侯の傍に在りて、天下の政事を佐くと云ふとも、何の不足の處か是れあらん。　君信じ臣敬し、士伏し民懷く。　位人臣を極むと言

ふとも誰か怪む事を得んや。　國強く民康し、寔に人中の龍鳳なり。　是大丈夫萬夫に傑出する者の懷とする所にして、宋朝の張商英無盡居士の如きは是其人なり。　官宰輔に登り、壽百齡に近くして、天下を泰山の安きに置く、是れ彼の先きに所謂禪を學んで儒を明むる底の名敎の老君子、佗をして禪を說かしむれば、衲僧、眉を皺め、三賢四果、魂膽を驚落す。　今時儒釋の學人、百端を究めて窺ひ探ると雖も、佗家の門閭戶庭も亦臨み見る事能はず、背後に立つ事も亦得じ。　末代の悲しさは、人每に外學を勸めて却て實德を排せんとす。　佛者は儒人に交るを見て喬木を下るの意をなし、儒人は佛者に交るを見て幽谷に入る思

ひを生ず。特に知らず、人々儒佛の名を以て染汚すべからざる實德ある事を。夫れ人の性の上には一物を添ふべからず、恰も紅爐の片雪の如し。但し儒佛は名にして毛皮の如し、大道は實にして骨髓の如し。有道の士は大道の骨髓のみを見て、皮毛の儒佛ある事を見ず、輕薄の族は骨髓の大道を求めず、却て皮毛の儒佛を隔つ、甚しき者は恰も寇讎の如くす、是誰が過ちぞや。只是古學亡びて至道隱れ、鄙習盛にして實德を棄るの致す處なり。公も亦他日功充ち學成ぜん時、儒なる事なかれ、佛なる事なかれ。名もなき自性を捉へて儒と名づけ佛と稱する者は、好箇娘生の好面皮、人を傭ひて苦ろに黥するが如し。好肉を剜りて瘡を生じ自ら己命を喪するに似たり。往々に儒人は錯りて儒にも非ざる心性を捉へ、强て拗へて、我は是れ儒なりと稱して佛者を譏敗し、佛者は錯りて佛にも非らざる明德を捉へ、强ておさへて、我は是れ佛者なりと稱して儒門を輕賤す。點檢し見來れば、總に是大道の本根を見ず、自心の玄微を窺ひ知らざるの致す處にして、學力淺薄なる驗し也。豈知らんや、人々本具の佛性は是を菩提と名づけ涅槃と稱し、儒門は是を至道と名づけ明德と稱す、李聃は虛玄と名づけ、孟軻は浩然と云ふ。各々の所見淺深なきには非れども、是只一也。一なりと雖も、諸稱一も相當らず。是を儒なりと言はんとすれば、丈夫

面上眉を畫くが如し。是を佛なりと言はんとすれば、新婦頷下に鬚を栽るが如し。傍觀腹を抱へつべし。儒に非ず佛に非ずして、能く仁に能く義なる物は、其れ只心性か。德、天地に齊しくして邊表を見ず、明、日月に並びて終始なく、天地と參つなる底の大物なり。儒釋の間に隱藏すべからず。陰陽を呑吐し、造化を取放し、秋葉春花みな他の恩力を受く。是故に道ふ、聖人は有言の天地なり、天地は無言の聖人なりと。自ら佛と稱し、自ら儒と稱するものは、郞を呼んで奴と成す、終に實德を失し、覺えず二敎の區域に投入して、吳越相隔つ。錯れるに非ずや。然りと雖も、儒を廢し佛を除いて而後に道を知れりとするには非ず。夫れ儒佛の二敎世に行はれて、並び貴き事は、上は政化を輔け、下は國家に利あるの大器なり。此任に處するの人、豈に容易ならんや。苦み勤めて一旦心地開明し、智光煥發し、理事貫通し、物我冥合せざる時は、彼の人欲の私に克つ事能はず。縱ひ才藝他に越え、七尺の身財ありて、學百家を究むと雖も、只是少しく文字を解する底の凡愚、何の實德有りてか人世を利する底の盛事あらんや。若人參禪苦學し、見性了々分明にして、掌上を見るが如く、而後に人を利するに便あらば、儒と言はんも亦可なり、佛と道はんも亦可なり、莊老列と稱せん又可なり。若又毫釐も見道の力無くして、謾に輕薄の凡解を持せば、儒と稱

せんも是不可、佛と稱せん又不可、莊老列と稱せん總に不可。是にもせよ非にもあれ、他人の極則とする處を捉へて一回見徹し、唐儒宋儒の力を盡したる所を底に徹して見得透し畢りて、其上の取捨は手前の心次第に候。左も無之、只推量の分際にて彼是と了簡被致候ては、達人とは申されず候。末代の弊風にて、儒釋共に只平常無事を貴しとして、妄想の窠窟に困屈して、學業廢れ果て、斯文喪盡する事、寔に以て苦々敷事どもに候。近代神家者流及び儒人と稱する者どもは、纔に七五卷の書冊を讀み、三五月の讀講を聞く時は、妬火竊に起り、嫉熖俄に熾にして、排佛を以て急務とす。嗟、佛の儞に於ける、何の科かある、儞の佛に於ける何の寃かある。只是暫時の妬忌に蓋はれ、神理の如何を辨へず、佛乘の如何を察せざるの致す處なり。愿に夫佛は三世貫通せる大聖なり、神も亦三世洞明、佛と異る事なし、是內秘同躰なる故なり。顧に夫れ我が六十州の扶桑、八萬軀の鎭座有て、高明の德を懷けり。靈驗妙應寔に在すが如し。佛日桑枝に上りてより後ち千有餘載、豈に八萬軀の佛像のみならんや、豈に千萬軸の經卷のみならんや。是本迹不二、水波同躰なる者にあらずや。佛敎若し國家に害あり、生民に利あらずとせば、土は是神の國、人は是神の民なり、何の欽む處ありてか坐ながらにして是を見んや。蓋し神是を忌むと雖も拒む能はず、千

載の下、諸君の力を借て、是を妬害すと爲んか。若又儒人は排佛の志を束ねて、道德仁義の上に置き、神家は排佛の志を收めて、內秘神理の玄奧を窮めなば、惟れ德日々に高うして祥を子孫に貽さん。是良策にあらずや。昨日處士あり、予が室を扣いて、再拜して告て曰く、近頃僕讀書の暇少しく靜坐を學ばんとす。動に靜に人欲の制し難き事、狄國を治むるが如し。一日治むれば五日亂る。片時靜にして長時動く。尋る時は痕迹なし。爵祿をも辭しつべし、白刄をも踏つべし、人欲をば制すべからず。僕是が爲めに困倦せられて起つ事得ず。大師願くは愛憫して開示し玉へと。予が曰く、嗟、其事あらん。今時儒佛の學人、是が爲に災厄せられて克ち得る事なし。古人は能く其病因を知て本根を拔く、今人は病因を知らざるが故に醫治する事能はず、終に死亡を取る。死亡を取るとは棄廢して本志を失ふなり。處士の曰く、得て聞つべしや。予が曰く、儒門は是を人欲と言ひ、釋氏は是を結使の煩惱と言ふ。共に是一箇の舊習々氣なり。常に根本無明の中に入て竄る。是故に制し得る事を得ず。今時禪道佛法を修習する底、此黨間々多し、是を二乘聲聞の部類と云ふ。彼れが言に曰く、道は高遠なる事なし、行住坐臥の間を出でず。火は暖に水は冷し。只分別思想を盡さば足れらくのみ。何の參禪辨道をか假らんと。彼の儒家者

流の、道は彝倫の間を出でずと言ふ輩と、同一模範なり。是を黠慧と名づけ、病因と云ふ。　道を見ざるを病本とす。夫れ人は道を見る時は、結使斷じ、人欲盡く。　譬へば夜途、人あり、妖魅の爲めに欺誑せられて、衆苦逼迫せんに、觸目みな妖魅にして、廻避するに處なけん、漸く天明に到て、太陽纔に照す時は、群妖百怪、潛み隱れて、捜索すれども得ず、寔に睡夢の覺るが如し。　須く知るべし、妖魅を拂ふ事は太陽に過ぎたるは無し、人欲を制する事は大道に超えたるはなき事を。　人若し道を見ざる時は、人欲結使、根本無明の中に入て竄れ、賴耶含識の間に潛んで、動もすれば、六賊を捉へ八邪を引いて、千變萬化、靈臺を混亂す、心王是が

ために欺誑せられて、安き事能はず、觸目みな業障輪廻と化す。　恰も妖魅の夜途を惱すが如し。　一旦智光淵發し、大道乍ち轉出する時は、惠日大に照耀して、大地山河、本有の明德と化し、毘盧の全身と現ず。　八識崩れ裂け、無明碎け破る。　此に於て結使斷じ人欲つく。　賊壘破れて群賊空するが如し。　業障輪廻、土を拂て點塵なし。　夫子は是を性相近し習相遠しと宣玉ひき。　是故に少室曰く、若し人佛道を成ぜんと欲せば、先づ須く見性すべしと。　譬へば人あり、夢中に種々の苦患を受んに、百端を究むと雖も、夢中に在りては救ふ事を得ず、夢中の苦を遁れんとならば、夢をさますに如かず。　今時儒釋の學人、大道を見ずし

て、煩惱を斷ぜんとし、人欲に克んとす、恰も夢中に在りて種々方便し、夢中の苦患を遁れんとするが如し、轉た苦患を增すのみ。罪、大道の淵源に徹せず、相似口傳の道を以て得たりとするにあるらくのみ。或は涸轍の魚の一口の水を足れりとして大海を求めざるが如し。寶藏論に、此等の人を少しく安んじて、大に安き事を知らず、癡鳥の蘆に栖んで深林を求めざるに喩ふ。蓋し道は稻粱に喩へ、人欲は稗稊に喩ふ。稗稊叢茂するときは、稻粱自ら盡く。稻粱叢茂するときは、稗稊自ら隱る。此故に稗稊を盡さんと欲せば、須く稻粱を養ふべし。人欲を制せんと欲せば、道を見るに如かず。稻粱若し稗稊の底に蔓埋せられて、然して稗稊を制せんと欲すと雖も得べけんや。恰も人の人欲の底に蓋覆せられて人欲を制せんとするが如し。愚者は常に山河大地を全うし人欲の苦域と成し、智者は常に山河大地を全うし大道の眞體とし、己靈の明德とす。君子若し人欲を制せんと欲せば、急に須く道を見るべし。是を病因を知り、病本を拔くと云ふ。處士欣然として去る。是又暫時の拙語と雖も、少しき道理なきに非ず。此故に書付進申候。別紙に御書付被遣し偶作の詩は、大略能く御座候。趙州無の字の拈提は、更に相屆き不申候。誠に實參實悟とこそ申候へ。隨分親切に參究可被成候。古の禪林、眞風未だ地に落ざりし時、眞正

參玄の上士の如きは、如上少分の相應を以て足れりとせず、自の得力の眞僞如何を辨ぜんが爲に、箇の難透の話頭を把りて看過す。如何となれば、玉は火を以て試み、金は石を以て試み、水は杖を以て試み、人は言葉を以て試む。是叢社の古實なり。既に佛祖の心を明らむ、何ぞ佛祖の語を會せざらん。南泉一株の花、乾峰三種の病、趙州青州の布衫、陳操行脚の僧、是を法窟の爪牙と名け、奪命の神符と言ふ。如上の毒焰に於て毫釐も凝滯あらば、生寃家の如くし去て、竪に咬み横に爛嚼し、一旦不合に通身白汗流れ、爆然として咬破せば、多少惡毒の難所、萬里の異鄕に妻子の面を見るが如けん。是則眞正大事了畢、囫地一下底の時節、初て大安樂大解脱の田地に到れりとす。四海に横行して、獅子の遊行するが如く、獨歩無畏ならん。千七百箇の善知識と稱して、點滴も施さずして大法施を行じ、衲子に慚る事なけん。若此故事に達せず、徒に口耳皮薄の禪を傳へ、見聞覺知を認め得て足れりとせば、終に人情下劣の阿師と成り、處々に於て藥汞相似の禪を說いて、多少學人の悟門を妨碍せん。悲哉、婆禪一度び耳に落れば、學者一生痛快に打發する事能はず。恐れても恐るべきは、平常說破の一路なり、是を無裩草裡の禪と云ふ。學者一回此門に蹎入する時は、祖關難透の殺所に到り、死に到る迄打脫する事能はず、恰も炮硝を平地に盛て、火を放て

鐵火を散さんとするが如し。硝煙廣野に盈つと雖も、丸は依然として舊所にあるらくのみ。獨り大勇猛の上士有て一則難解の狠毒語を執て、舊見を放下し、大疑團を起して、單々に參究して、生蛇竹筒に入るが如くし去るをば、閣いて論ぜず、恐くは竹筒に入り去る事能はざらん事を。

和歌は無案内に候へ共、返しの眞似仕、進申候。

瓢箪の浮きぬ沈みぬむつかしや、只つきはなしに果ててこそ。

右之返し吟弄の後、斷滅空の御氣遣必々御無用に候。修行者は一旦斷滅空の土底へ深く落ち入り不申候ては、中中確と致したる得力は出來申さゝる事に候。申迄は無之候へ共、誓て大丈夫の志氣を憤發して、是非々々一同冷暖自知せずば置くまじきぞと、勇猛の御志肝要に候。自己心上の一件にて侍れば、唐天竺の事尋ね申程六ケ敷事にても無之候。左もなく候ては、一生眞實御安堵の時節は有之間敷候。唯返す〴〵も遠方の事とて時々御目に懸られず候事、殘念の至に候。此上思召も出來候はゞ、無御遠慮可仰被聞候。幾度も可申承候。道中便にては何方まで賴遣申候はゞ、貴翁の御役所迄相屆き申候哉、重ての使に書付け可給候。此狀急便故清書も不仕進申候。卒畧の書面御免可蒙候。恐惶不布。

月日

廣瀨典先生

蒲右

略註

頁

（二）三教。佛教・儒教・道教をいふ。

（四）貫レ之。論語に、孔子曰く、吾が道は一以て之を貫くと。

（四）浩然。孟子曰く、我善く吾が浩然の氣を養ふと。

（四）力を用ゐること久くして一旦豁然として貫通す。朱子の大學章句の語。

（四）晦庵。朱子の號。

（六）寒拾二賢士。寒山・拾得。

（七）二程。程明道・程伊川。

（七）三蘇。蘇老泉・蘇東坡・蘇子由。

（八）夷齊。伯夷・叔齊。

（九）靈均。屈原。

（九）浮圖氏。佛者。

(一〇) 堠店。道程の意。

(一〇) 子由。恐らくは子游の誤ならん。

(一一) 譫語。うはこと。

(一三) 伊の三點。悉曇の伊の字は三つの點を以て成る。

(一五) 孟武伯・子由。孟武伯の三字削るべし。子由は恐らくは子路の誤ならん。

(一七) 大千。三千大千世界。

(一七) 南溟。南海。

(一七) 海若。海の神。

(一九) 文公。朱子のおくりな。

(一九) 大小大。さすが。

(二一) 四端。孟子に、惻隱の心は仁の端なり、羞惡の心は義の端なり、辭讓の心は禮の端なり、是非の心は知の端なり、とあり。

(二二) 安行生知。安んじて行ひ、生れながらにして知る。聖人をいふ。

(二三) 三賢。聲聞・緣覺・菩薩。

(二三) 四果。須陀洹・斯陀含・阿那含・阿羅漢。

(二四) 娘生。母親より生みつけられたところの、といふ意。

(三一) 結使。煩惱の異名。心身を繫縛し、苦果を結成するを以て結といひ、衆生に隨逐し、又衆生を驅使するを以て使といふ。

(三一) 根本無明。無始以來、一念の不覺によりて、長夜昏迷して、眞理を了らず、一切の諸惑煩惱を生ずる本源なり。

(三二) 頼耶含識。第八阿頼耶識。一切の事物の種子を含藏するを以て、含藏識といふ。

(三二) 六賊。色聲香味觸法の六塵、眼耳鼻舌身意の六根を媒として、功德の法財を劫掠するを以て、譬へて六賊と爲す。

(三二) 八邪。八正道の反對なり。一に邪見、二に邪思惟、三に邪語、四に邪業、五に

邪命、六に邪方便、七に邪念、八に邪定なり。

(三二)靈臺。心をいふ。

(三三)毘盧。毘盧遮那の略語、法身の如來。

(三六)南泉一株の花。陸亘大夫、南泉と語話する次、陸云はく、肇法師道く、天地と我と同根、萬物と我と一體と、也甚だ奇怪なり。南泉、庭前の花を指して、大夫を召して云はく、時の人、此一株の花を見ること、夢の如くに相似たり。

(三六)乾峰三種の病。乾峰和尚上堂曰く、法身に三種の病、二種の光有り、須く是れ一たび透過して始めて穩坐地を解すべし。雲門、衆を出でゝ云はく、庵內の人、甚麼としてか庵外の事を知らざる。峰呵呵大笑す。門云はく、猶ほ是れ學人が疑處。峰云く、子は是れ什麼の心行ぞ。門云はく、也た和尚の相委悉せんことを要す。峰云はく、直に須く恁麼に穩密にして始めて穩坐地を解すべし。門云はく、喏喏。

(三六)趙州青州の布衫。僧、趙州に問ふ、萬法、一に歸す、一、何の處にか歸す。州云はく、我、青州に在つて一領の布衫を作る、重さ七斤。

(三六)陳操行脚の僧。陳操、一日、衆官と樓に登る次、數僧の來るを望み見る。一官人云はく、來る者は總に是れ禪僧。操云はく、不是。官人云はく、焉んぞ不是なることを知らん。操云はく、近づき來らんを待つて、汝が與に勘過せん。僧、樓前に到る。操、驀に召して云はく、上座と。僧、頭を擧ぐ。操、衆官に謂つて云はく、道ふことを信ぜずや。

(三六)㘞地一下。豁然大悟の意

既刊

白隱禪師著 夜船閑話　價二五錢　送二錢

大應大燈徹翁三祖法語　價五〇錢　送二錢

近刊

白隱禪師著 遠羅天釜　上 中 下

慧海禪師著 頓悟要門論

○刊行豫定書目は御申込次第拜呈

昭和九年二月十日印刷
昭和九年二月十五日發行

定價金參拾錢

編輯兼發行人　東京市世田谷區上馬町一丁目七六二　松島通雄

印刷人　東京市淀橋區戸塚町一ノ二二〇　永島喜代次郎

印刷所　東京市淀橋區戸塚町一ノ二二〇　明立印刷株式會社

發行所　東京市世田谷區上馬町一丁目七六二　洗心書房

終